日本の抵抗詩

壺井繁治／他＝編

光和堂

日本の抵抗詩／壺井繁治／他編

光和堂

編者略歴

秋村　宏	1931年東京都東村山市生れ。日本現代詩人会会員，詩人会議会員。
浅尾　忠男	1932年大阪府堺市生れ。日本現代詩人会会員，詩人会議会員。
片羽登呂平	1925年岩手県盛岡市生れ。日本現代詩人会会員，詩人会議会員。
城　侑	1932年奈良県吉野生れ。日本現代詩人会会員，詩人会議会員。
壷井　繁治	1898年香川県小豆島生れ。詩人会館運営委員長。
土井　大助	1927年山形県鶴岡市生れ。日本現代詩人会会員，詩人会議会員。
宮崎　清	1927年群馬県高崎市生れ。詩人会議会員。

日本の抵抗詩

●一九七四年九月二〇日　印刷
一九七四年十月一〇日　発行

壷井繁治・外編

草鹿直太郎　発行

赤城印刷㈱　印刷

検印廃止

東京都豊島区西巣鴨一―一五―四　光和堂

振替番号　東京六八四一四番　電話(918)四二六八番

(分) 0092 (製) 0037 (出) 2304

日本の抵抗詩

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

序文

序文

壺井繁治

日本の近代詩は明治一五年（一八八二）刊行の『新体詩抄』を起点として、すでに九〇年以上の歴史を経ている。この間、さまざまな詩の傾向や流派が起伏したわけであるが、その時代、時代の支配者的動向、権力体制にたいする抵抗の詩が一つの底流として流れつづけたことは否定できぬ。明確にその先駆となった詩人は北村透谷、児玉花外、石川啄木などであり、これら先駆者の遺産と業績とを継承して、それをいっそう発展させたのが、大正末期から昭和へかけてのプロレタリア詩である。それは日本人民を支配権力から解放しようとする道に沿った、詩の最も自由な民主主義的開花と結実との過程であった。その後、日中戦争の開始、第二次世界大戦の勃発、敗戦、アメリカ軍による日本占領など、かつて日本民族が歴史的に経験したことのない激動期にあって、自由と民主主義とを真にわが物としようとする人民大衆の広汎な運動が展開されていった。このような情勢の中で、日本の抵抗詩は小さな一つの底流としてでなく、もっと大きな流れに膨れ上っていった。

本書はこの抵抗詩の流れを歴史的に跡づけるために編まれたものであり、作品を時代順に並べた抵

抗詩のアンソロジーであるとともに、抵抗詩の流れを一つの軸に据え、そのような詩が生れた時代的・社会的現実の動向に立ち入って解説を試みたところに大きな特色が見られるし、またここに収録した個々の作品と作者とについて、時代と関連させつつ、特徴的な点を要約的に解説したところにも、編纂の積極的意図がうかがえるであろう。

九〇年以上にわたる日本近代詩の歴史において、日本の詩は多様に変化した。したがって一口に「抵抗詩」といっても、決して一様ではない。たとえば児玉花外の『社会主義詩集』に収められ抵抗詩の単純な叫びのごときは、ここに収録されている戦後、あるいは安保体制治下の抵抗詩においてはほとんど見られぬであろう。そしてその単純さを蔑視する者もあるかもしれぬが、われわれの抵抗詩はそこから始まったのであり、そこにまた歴史の積み重ねの面白さが、このアンソロジーを通してかんじられるであろう。

本書を編むに当っては、直接的に支配権力に対決した詩ばかりでなく、もっとひろい観点から権力者がつくりだす社会的気流へのさまざまな異和感を表現した作品をも収録することで、いわゆる「抵抗詩」の多様さに留意した。したがってここに収録した諸作品に盛られている詩的思想、認識、表現手法、情緒的ニュアンスなどの多様さの。錯綜の中に抵抗の一本の赤い糸を摑んでくれれば、編者としてはこの上ない幸である。

なおここで一つお断りしておきたいのは、このアンソロジーに収録した詩人の中で、その生没年月の不明な者やまったく消息不明の者が可なりあり、可能なかぎり調査したわけであるが、残念なが

ら今日まで連絡のつかなかったことである。後日、それらがあきらかとなれば補正したいと考えている。さらに本書の編纂に直接当った者は秋村宏・浅尾忠男・片羽登呂平・城侑・土井大助・宮崎清の六名であるが、全体に眼を通したわたし自身も編纂上の責任を負う一人であることを、最後に附言して置く。

一九七四年八月

日本の抵抗詩／目次

序文……壺井　繁治…3
第一章　明治・大正……13
明治・大正期解説……宮崎　清…15
明治・大正詩篇……片羽登呂平編…37
自由の歌……小室　屈山…38
厭戦闘……宮崎湖處子…41
失業者の自殺……児玉　花外…42
工場の汽笛……大塚　甲山…43
提灯行列と老母の声……千伏　花子…45
帰れ弟……小杉　未醒…46
君死にたまふことなかれ……与謝野晶子…48
乱調激韵……中里　介山…50
お百度詣……大塚堅緒子…52
三つの声……松岡　荒村…53
狂夫吟……内海　泡沫…55
ポンポコ歌……木下　尚江…57
血祭……原　霞外…58
小さきむくろ……樋口　配夫…60
蒼蠅の歌……川路　柳虹…62
誠之助の死……与謝野鉄幹…63

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

墓碑銘……石川　啄木…65
須賀爺……根岸　正吉…67
工場哀歌(二)……伊藤　公敬…68
三人の親子……千家　元麿…69
蒼　空……室生　犀星…70
一つの列車とハンケチ……福田　正夫…71
耕地を失ふ日……白鳥　省吾…73
ローザ・ルクセンブルグ嬢を懐ふ……正富　汪洋…74
五月祭の朝……百田　宗治…77
軍　隊……萩原朔太郎…79
この位のことは、あたりまへだ……小牧　近江…81
この残酷は何処から来る……福士幸次郎…83
野　獣……大杉　栄…84
俺は靴底だ……新島　栄治…85
再生の日の海を眺めて……松本　淳三…86
雪の線路を歩いて……後藤謙太郎…89
吹雪の葬式……渡辺　信義…91
日比谷……萩原恭次郎…92
頭骸骨……奈良　幸夫…94
野良での話……渋谷　定輔…95
頭の中の兵士……壺井　繁治…96

第二章　昭和（前期）……101

昭和（前期）解説……浅尾　忠男…103

昭和（前期）詩篇……城　侑編…125

稲作挿話……宮沢　賢治…126
山村食料記録……森　佐一…128
坑内の娘……松田　解子…129
苦しい唄……林　芙美子…131
あいつ安んぜよ……小林　園夫…132
戦　争……北川　冬彦…136
拷問に耐へる歌……田木　繁…137
俺　達　だ……ビー丸のK…138
早　春……森山　啓…140
午後十時……竹内てるよ…142
おれの飛行船……陀田　勘助…143
地理的反則……更科　源蔵…144
間島パルチザンの歌……槙村　浩…144
兵隊さん……浅井　一雄…151
坑　内……内田　博…152
サーカス……中原　中也…153
手……今村　恒夫…155
落　葉……木村　好子…157
屈　辱……今野　大力…158
伏　字……さかい・とくぞう…161
戦　争……金井　新作…162
勲　章……宮木喜久雄…163
蹄鉄屋の歌……小熊　秀雄…164
しようげんぼう……及川　均…166
虫けら……大関松三郎…168
夜　闇……佐川　英三…170
吹雪の中にうたふ……浅井十三郎…171
戦　争……金子　光晴…173

炭……山之口　貘……175
七月二日……赤木　健介……176
雷　雨……倉橋　顕吉……177
夜の春雷……田辺　利宏……178
廃　兵……前黒　迷太……180
川　蟬……鈴木　政輝……181
鼠ども……杉山　穣……182
鳩……安藤　一郎……184

第三章　昭和（戦後）……187

昭和（戦後）解説……土井　大助……189
昭和（戦後）詩篇……秋村　宏編……237
水ヲ下サイ……原　民喜……238
小銃記……安西　均……239
米……天野　忠……241
炭殻置場……星　隆平……242
一九五〇年の八月六日……峠　三吉……243
自由労働者の歌……舟方　一……246
引き裂かれたもの……黒田　三郎……249
折れた線香……杉浦　三郎……251
オルグ……福田　律郎……254
燈の帯……小野十三郎……256
アメリカシロヒトリ……緒方　昇……258
入党した少女……片羽登呂平……260

塔の歌……井手　則雄…263
石が怒るとき……真壁　仁…266
軍　港……長島　三芳…268
湯ぶねの中の童謡の死……谷　敬…269
中小企業精神……秋村　宏…273
石　油……遠地　輝武…275
カード……赤木　三郎…276
理髪店にて……長谷川竜生…278
土性骨……土井　大助…279
弔　辞……石垣　りん…284
死んだ男の残したものは……谷川俊太郎…286
許されない……宗　左近…288
「大国日本」……村上　国治…291
辺戸岬……船越　義彰…292
記号について……赤山　勇…295
エド&ユキコ……吉野　弘…297
沖　縄……城　侑…300

第一章　明治・大正

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c